

幼小をつなぐ学びと育ちの連続性の共有

—エピソード記録を通して—

○丁子かおる（和歌山大学教育学部） 奥村 孝（和歌山市立雑賀崎小学校・幼稚園 校長）
太田英一郎（和歌山市立雑賀崎小学校 教頭） 的場かおり（和歌山市立雑賀崎幼稚園 教頭）
青木菜莉（和歌山市立雑賀崎幼稚園） 太田由美子（和歌山市立雑賀崎幼稚園） 寺岡麻里（和歌山市立雑賀崎幼稚園） 池谷義輝（和歌山市立雑賀崎小学校） 北野美和（和歌山市立雑賀崎小学校） 木下雄生（和歌山市立雑賀崎小学校） 出口 静（和歌山市立雑賀崎小学校） 西川菜々子（和歌山市立雑賀崎小学校）
森本孝子（和歌山市立雑賀崎小学校）

I. 研究の背景と目的

1. 研究の背景

「幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の在り方について」(報告)¹が平成22年に公表され、幼小の定期的な交流については多くの学校園で実施され、幼小接続カリキュラムについても各学校や自治体ごとに進められている。交流については、教員間で交流についての話し合いや実施、年間計画に交流行事を取り入れるなど、様々な取り組みが各校園で行われてる。しかしながら、接続については、その多くは幼児期後半から小学校入学後の2～3か月の期間を対象とするアプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの編成に重点がおかれ、就学時の児童の混乱回避を念頭にした一時的な接続となっており、9年間の子供の育ちと学びを継続的に支える取り組みになっていない。

2. 研究の目的と方法

そこで、本研究では、子供の主体的な学びを共有しながら幼小連携を続けている雑賀崎小学校・幼稚園において、幼児期からの育ちと学びを小学校につなぐことで、子供が主体となって教え合い学び合える子供を9年間を見通して育む質の高い教育、育ち育てあう小規模校・園による教育実践を行うことができると考えた。そのために、以下の3点を目的として研究を進めていく。

① 幼児期から児童期の発達と学びについて9年間を通して捉える。

② 幼児教育と小学校教育における指導と支援・援助を教員間で共有する。

③ 幼児と児童の連携を継続して行う。

研究方法としては、第1回；幼小教員間（概ね全教員が参加）で協議、第2回；子供の学びと育ちの姿について接続する教育・保育（地震・防災保育の共同での実施、高知大学との科研による共同研究であり別途報告²）、第3回目；幼小それぞれの教員による育ちと学びを記録し検討するエピソード記録を用いての検討会を行った。

（※新型コロナウイルス感染防止のため限られた期間での実施となっている。）

II. 幼小接続研究会の経過

打ち合わせ及び実施状況と経過は図1である。

	日時	内容	場所
0	事前打ち合わせ：8月7日(金)	テーマの検討と幼稚園における週案の書き方について検討	雑賀崎幼稚園
第1回	11月5日(木) 9:15~11:30	地震防災保育・教育	雑賀崎小学校 体育館
第2回	12月4日(金) 15:30-16:45	研究方法等協議	雑賀崎幼稚園 遊戯室
第3回	1月28日(木) 15:15-16:45	エピソード記録検討会	雑賀崎幼稚園 遊戯室

図1 研究会実施の経過

Ⅲ. 幼稚園と小学校各教員によるエピソード記録を基にした協議

ここでは、特に第3回の取り組みについて焦点を絞って報告する。

第3回 2021年1月28日(木) 15:30-16:45
幼児及び児童のエピソード事例を基に小学校教員及び幼稚園教員が協議を行った。司会進行は、幼稚園的場教頭で、資料は1)~3)のエピソード6事例と『幼稚園教育要領』総則(幼稚園教育の基本、育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」)である。

最初に、奥村校園長より挨拶があり、その後、幼小教員よりエピソード記録について説明があった。その後、全体で協議を行った。

その後、丁子と奥村校園長より次年度の取り組みについての説明と提案を行い、小学校太田教頭より終わりの挨拶があった。発表及び協議内容を以下に示す。

参考：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)
(1)健康な心と体 (2)自立心 (3)協調性 (4)道徳性・規範意識の芽生え (5)社機との関わり (6)思考力の芽生え(7)自然との関わり・生命尊重 (8)数量や図形、標識や文字などへの感心・感覚 (9)言葉による伝え合い (10)豊かな感性と表現 文部科学省『幼稚園教育要領〈平成29年度告示〉』より

1. 幼稚園 青木菜莉教諭(4歳児クラス担任)

エピソード記録の説明-1月14日(木)・15日(金)の事例-「磁石」-以下は、概要。

A児とB児が磁石を見つけて試すうちに紙管に半数を落としたことから、手に持っていた磁石と紙管の中の磁石がくっつた。このことをきっかけに磁石が「ものをはさんでもくっつくこと、磁石を直接に触れなくても動かせることに気づき、折り紙や椅子の背もたれ(鉄・木の部分)など素材を変えてはさんでくっつけたり磁石の数を変えたりして試していく。試行錯誤し、何度か試しているうちにくっつくもの(場所・材質)を確かめたり、A児とC児で磁石の量を変えて釣り上げるなど、二人で色々なくっつき方を発見したり、机の下から机の上の磁石を動かせる(磁力)



などを他の友達に知らせたり、教えて一緒に遊ぶ姿があった。保育者は子供の様子に合わせて、ホワイトボードやクリップ、磁石、割りばしなど遊びに使う材料を増やして置いておくなどの援助を行っている。その後、MA児が割りばしと磁石で釣りゲームをしたりA児がクレーンゲームをつくらうとしたりする姿に発展していった。

○小学校より意見等

・理科の範囲。幼稚園で遊んでいるのはレベルが高く、就学時には(学習の)素地ができていていると感じた。もっと考えていこう!とつなげていける。10の姿では、(8)の数量と(3)協調性の姿がある。(3)では、どの教科でも友達と工夫しあったり友達をみて考えたりする学び合いが繋がっている。
・遊びとしては、2年生の生活科でもおもちゃづくりがあって風を受けて走る車であるウインドカーや、釣り遊びも生活の教科書にある。3年生も磁石の単元があり、磁力、コイルと発展していくが、箱の中に磁石を入れてその上に磁石の車などを乗せて操作するなど同じようなことを学習でも行っている。幼稚園の遊びの中で場所、動かすもの引っ付くところと引っ付かないところを(アルミ、スチール)探すのは3年生の物質や、図工にもつながる、物質や理科の磁石、単元にある知識にもつながっている。遊びの中で学んでいると感じた。
・他の友達に共有する、そこから遊びが広がるといのが学びの本質。素敵な姿があった。

●幼稚園より意見等

・紙管の中の磁石をクリップで磁石を釣り上げようとして釣り上げられないで工夫するという姿が、

⑥思考力の芽生えが、4歳児なりに物の性質に気付いている。また、お友達と一緒に考えるのが⑨言葉による伝え合い、友達と考え合う③協同性であり、自分の力でやってみて友達と考える②自立心であきらめずにやり遂げようとする年長児に近づいてきた4歳児の姿であり、遊びの中で遊びの深まりと様々な育ちが見られた。子供自身が自分たちでやったという気持ちを持って追及していきけるように、保育者が育てたい力をきちんともっていくことが、それが小学校の気付きにつながると思った。

・子供自身が興味を持って十分に探求したことで②自立心の育ちがあり、それを友達に気持ちを伝え合おうとするところが⑨言葉による伝え合いや③協同性の育ちがあったと思っている。

2. 森本孝子養護教諭 「雑賀崎小学校保健委員会の取り組み」(幼小交流記録の説明)

以下は、概要。

小学校での児童保健委員会での取り組みで健康に関する啓発として幼稚園を委員会児童が訪問する活動を行っている。今年度は、新型コロナウイルス感染症予防のため、年長児クラスに限定して訪問し交流を行った。感染症予防となるマスクの着け外しやウイルスの飛ぶ距離、咳をするときの注意などの実演と絵本の読み聞かせを通して自分で着替えができる・体を知って大切にすることを児童が幼児たちに伝えることが内容である。なお、今回の児童は、全員が雑賀崎幼稚園の卒園児である。

当初は、不安そうな様子であった委員会児童たちであったが、やり終えたときにどんな風な自分になってたらいいかを考えるように伝えたとこ、前向きな意見を話すようになった。その後、役割分担を行いつつ、園児に分かりやすい言葉やニコニコハッピー(という絵)など視覚的に分かりやすい工夫を話し合いながら、児童達は5人で協力して準備と発表の練習を行っていた。事前に、保健室によく来るDさんがお知らせハガキを書き、森本教諭と一緒に幼稚園に届けた。当日、委員会児童は、緊張感を持ちながら児童なりに様々な個性の幼児に対応し、協力しながらそれぞれが役割を果たすことができた。また、幼稚園教諭のタイミングのよい援助などもあって、幼稚園の年長児たちも静かに一生懸命に児童の発表を聞いていた。振り返りで児童から「頑張って大きな声で発表できた」「かわいかった」

など達成感と自己有用感を感じる言葉がたくさんあった。

見通しを持って小学校に入学することを幼児に今後も伝えたい。健康は幼稚園から小学校へ9年間続く、その後も続くため、長い目で培っていきける取り組みをしていく。

○小学校より意見等

・Tさんは学級の中では書くというところに困難がある。教室での姿とは違ってこの活動の中で、静かに聞いてくれる幼児に伝えようと一生懸命で、幼児に何とか言葉で伝えたいという思いを持って自信をもって言葉で発表していた。また、6年生もTさんをフォローしながら視覚的に見せて活動してくれていた。言葉での伝え合いの育ちがみられた。

・子供中心になるように関わってくれた場面。ネガティブに考える児童に、子供達の努力で問題を乗り越えた時のよいイメージを考えるよう、森本先生が伝えた事で児童が前向きに活動することにつながった。委員会だけではなく、2年生の郵便配達の学習と連携して取り組みが実施されており、小学校全体の持てる力が総動員されて支えられて、良い実践になった事例であった。

・マイナスな思考が先に出て取り組みに入りにくい時の森本先生のアドバイスを参考に担当している児童が課題に取り組みにくいときにしたい。また、それでできた時の達成感は大きいと思う。

・森本先生より補足 Dさんと幼稚園にハガキを郵便配達に行った際に、幼稚園の先生が遊んでいた幼児達を集めたのでDさんが幼児達に穏やかに渡せ、「幼稚園に持っていけてよかった」と喜んで話した。委員会の児童やDさんは雑賀崎幼稚園の卒園児でもあり、安心して発表できる場も提供してもらえたこと、雑賀崎幼稚園で育った子供達が小学校にきていることもうれしかった。

3 池谷義輝教諭(2年生A組担任)(エピソード記録の説明)

「2A 児童の実態と成長～『学び合い』の中で～」として、児童の実態と成長について3つのエ

ピソード事例が報告された。雑賀崎小学校では、全学年を通して、子供が授業を進行し、意見し合い、教え合い、学び合う学習『学び合い』の授業で学習をしている。役割をこなすにはまだ至らないが、話し合いの場面や、課題を解く場面では、子供たち同士で指名し合い、意見を繋げていたり、分からないところはヒントを出し合って教えたりすることはできている。以下は、概要である。

① 「ずっさん ずっさん」国語科における題材「かさこじぞう」より

「かさこじぞう」で、昔話特有の言い回しや表現に興味や疑問をもって学習に取り組んでいたところ、じぞうがじいさまへのお礼のお正月の食べ物や品等を運ぶシーンで「ずっさん ずっさん」という重いものを引きずる表現があった。少し言語理解が難しいEさんがこの擬音語の理解に引っかかり立ち止まった。いつもは言葉で説明するFさんが、重いものを引きずって持ってくる動作を「こんなんやで!!」としてGさんと一緒に動きでやってみせてヒントを出す姿があった。国語の学習では、要領に沿って一つの言葉や意見に対して言い換えや付け足しなど、語彙を増やす目的で発表を繋ぐことが多いが、幼稚園での表現活動、1年生で集会発表、音読劇やせりふを読み合う、「おむすびころりん」の寸劇をしてきて語彙を増やしたり気持ちの理解を促してきたため、言葉だけではなく表情や動きで表現でき、Eさんにとっても楽しく理解できる機会になった。

② 「先生、かわりましょうか」

算数の授業時間に、1000を超える数について全体学習を終えた後、それぞれの児童で問題に取り組んでいた。計算はできるが数の把握につまずきのあるEさんに教師が個別指導していたところ、課題を早く終えたFさんが「先生、かわりましょうか」と自ら教え合いをする役を名乗り出た。教師がその場においても、自分たちの役目と意識できるようになっていることに感動を覚えた。年間を通して、学習を通して自分たちで学び合う、教え合うという意識付けが定着してきたので、大きな成長であり、仲間づくり、雑賀崎で学び合いをする必要な意識だと思った。教え合っ

③ 「幼稚園との交流の中で」

二学期から本格的に年長児と2年生の交流活動を行い、その度に学級会を開いて子供たちと準備、心がけ、企画を

話してきた。当初は、幼児への心配を発言していたFさんであったが、話し合っ

●幼稚園より意見等

・エピソード①で池谷先生が(幼児からつながる)「表現」として捉えて説明していた。保育者は、言葉を知ってほしい、言葉で表してほしいなど急いでしまうことがあるが、小学校の国語科で言葉だけではなく、どんな動きか、どんなことなのかを次に相手に伝えるときに、より分かりやすく体を使って表現するということがつながっていくということが学べた。幼稚園においても感動したこと、感じたこと、心からあふれることを自分なりの方法で表現すること、表現できる環境、しようとする

ことが大切だと改めて感じた。
・①～③すべてで⑩豊かな感性と表現と⑤社会生活との関わりの相手に伝わるように表現する「人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり」とつながっている。①のエピソードで同じクラスの中で相手に、③のエピソードで幼稚園の小さい子供にも伝わるようにと広がっていった。主体性を育てるのに子供たちがやりたいという気持ちを大切に②のエピソードでFさんが教えてあげたい、自分ならできるという思いにつながっていると思った。

・小学校の取り組み、授業や事例をみたことがなかったが、二人の実践を通して幼稚園での3年間の経験が積み重なって小学校につながっていると協議で感じさせてもらえた。子供の姿をイメージできて気付き合えてよかった。幼稚園から小学校へ学び合いが

○小学校より意見等

・(雑賀崎幼稚園では)幼稚園で一人一人が大切に育てられてきているので児童たちが優しくできるし温かい。5年生は9人のうち8人が雑賀崎幼稚園出身で個性も豊かで、支援の必要な児童もいるが、全員が意見を言えるまで待つ、声をかけるなどして全員の児童が意見を話している。高学年を担当していて幼児をみると色々な支援を考えるが、幼稚園で育ってきた姿をみると色々な経験をしているのが分かるのでそれを基に伸ばしたい。

◇丁子より

- ・良いエピソードを共有し協議を共有できた。
- ・教員同士で子供の育ちと学びについて互恵性を持って学び合い、9年間について見通しを持って共有できればうれしい。
- ・10の姿は小学校はそこから学びが小学校ではどう積み上がっていくか、幼児は10の姿のうちどの程度ができていいる所を教員は考えていきたい。
- ・子供の育ちにおいて幼児に基礎ができるが、小学校が臨界期と言われることが多いので、幼稚園教育と小学校教育を大切にしたい。
- ・雑賀崎では、少人数で子供たちを丁寧に連携してきているので、この9年間を通して見通しを持てると思っている。

4 次回から(丁子・奥村先生)

雑賀崎幼稚園・小学校の教育として現状を継続しながら、子供の主体的な学びを行う、子供が興味を持ったことを子供自身が探索する研究をしていきたい。9年間のスパンで、それぞれの教育・保育の質を向上し、子供の学びを広げ・深めていくために幼小の育ちと学びについて共有する。雑賀崎での子供主体の教育を深めていくために、来年度

は、他の小規模校・園とも連携していくことも考えている。

IV 共同研究の結果と成果

- ・小学校での異年齢の取り組みと幼児との交流を通して児童の育ちが確認できた。
- ・幼小の教員間でそれぞれの発達過程・段階における遊びから学習活動へのつながりについて事例を基に活動の共通理解が持てることで、担当する子供達への指導等に役立てられることが明らかになった。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考に協議を行ったことで、子供の学びと育ちについて、幼小で共通の観点を持って言語として明確化できた。
- ・幼小交流及びエピソード記録を基に協議を行ったことで、児童の学びのみならず育ちにも焦点を当てて、教員間で評価できた。
- ・教員間で手立てを共有することで、教育・保育の質の向上に役立てられる。
- ・全員で9年間を通して各年齢の子供について共通理解を促すため、思いを話し合える同僚性の育みとなり、そのことで、児童と幼児の理解が深まる。

以上より、隣接する小規模校における幼稚園・小学校教員の共同研究を通して、それぞれの教員の資質向上及び子供たちの教育と保育の質の向上を明確にしていきたい。

(研究協力者:学部3年生 多田勇斗 宮井菜緒)

¹ 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」文部科学省
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf

(2021.2 現在)

² 科研費での調査であるため別途報告する。2021.11.12 テレビ和歌山放映などでも紹介された。